

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

BORDERLESS HERITAGE

翻弄された地方劇

中国の秦腔

清水 拓野

神戸女学院大学非常勤講師

芸能のかたちは、時代とともにうつり変わってゆく。今回紹介するのは、中国政府が認めた文化遺産。しかし認定後も、かたちが固定されるわけではない。

革命とかかわってきた時代

中国の西北地域（陝西省や甘粛省など）には、秦腔という地方劇がある。この演劇は、今では国家レベルの無形文化遺産



秦腔の若手俳優による上演のようす。秦腔では最低限の小道具しか用いないで演じる

産認定を受けているが、かつては政治的思想を人民に伝達する手段として用いられるなど、これまで政治とかかわりながら複雑な歴史を歩んできた。とくに、

改革開放時代の苦難

中華人民共和国建国後は、俳優の政治意識や上演組織の体制や演目内容などに関する演劇改革が全国規模でおこなわれ、社会主義革命の推進のために、秦腔はより本格的に政治利用されるようになった。さらに、文化大革命期（一九六六～一九七六年）には、人民を政治的に啓発するための革命模範劇とよばれる演

在の若者のあいだで顕著にみられ、彼らはテレビやネットには興味を示しても、わざわざ劇場まで秦腔を観に行こうとはしなくなった。

こうした状況に直面して、秦腔劇団の公演収入も減少し、多くの劇団が経営不振に陥ってしまったのである。そして、ついには他の劇団と統廃合し、人員整理をおこなうようになった。例えば、秦腔がきわめて盛んな西安でも、市内の四つの秦腔劇団が、西安秦腔劇院として二〇〇七年六月に合併

統合された。その四つのなかには、西安易俗社という辛亥革命（一九一二年）のころから一〇〇年近くも存続してきた有名劇団まで含まれていたため、多くの者に衝撃を与えたのである。

無形文化遺産化によるあらたな展開

このように、近年の秦腔を取り巻く環境は厳しくなっているが、明るい変化の兆しもあらわれつつある。そのひとつの契機となったのが、秦腔が二〇〇六年に国家レベルの無形文化遺産

に登録されたことである。その背景には、改革開放政策による高度経済成長を経て自国文化に対する自信が強まり、かつての革命時代のように、中国政府が伝統文化を「封建的で、時代遅れの、近代化を阻害するもの」であるとはみなさなくなり、逆にそれを伝統的な価値を体現する貴重な文化遺産として再認識し始めた、という事情がある。さらに、ユネスコの無形文化遺産の保護条約にも影響を受けている。

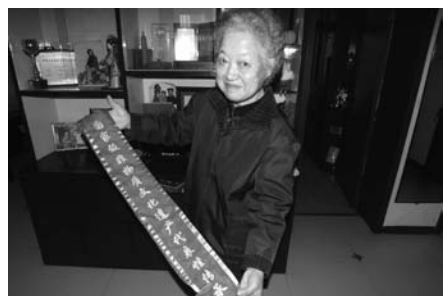
そして、こうした無形文化遺産

産化をきっかけに、秦腔の保護と保存をめぐる動きがさまざまな形で活発化してきているのである。まず、二〇〇九年五月には、秦腔の芸風を後世に伝えるために、政府が流派の伝承人を決めて秦腔の伝承活動を奨励するようになった。実績や芸歴に応じて、実際に何人かの名優が伝承人として選ばれ、弟子への教育活動もより積極的におこなうようになったのである。また、二〇〇九年九月には、政府の出資で陝西秦腔博物館が西安で開館した。これは、秦腔の歴史や

芸能の特徴などを幅広く紹介するために設立されたものである。興味深いことに、陝西省と同じく秦腔が盛んな甘粛省の蘭州にも秦腔博物館があり、陝西秦腔博物館と開館日を競うような形で設立された。秦腔の保護と保存をめぐる動きがそれだけ盛り上がっている、ということだろう。



陝西秦腔博物館の開館式のようす。多くのメディアがこのようすを取りあげた



余巧雲さん。秦腔の流派伝承人のひとりとして選ばれた女優



陝西秦腔博物館の展示。衣装や脚本から舞台装置の展示まである

かゝって、これまで秦腔は、時代に翻弄され、さまざまな苦難を経てきたが、無形文化遺産化したことによって注目度が上がり、人びとの保護と保存の意識も一層高まったようである。もちろん、芸能としてのバイタリティを保つためには、継承だけでなく、革新していくことも重要であり、それをどのように促進していくかが今後の課題であろう。とはいえ、継承の問題に目を向けられるほど、衰退の一途を辿っていた秦腔が復興しつつあるのは、大きな希望といえるだろう。

